

耕作放棄地活用し市民農業者塾 南足柄 新たな担い手育成

「農ある暮らし」を形成

耕作放棄地の解消に取り組み、新たな農業の担い手を育成する市民農業者塾が南足柄市で4月に開設された。立案したのは元同市幹部職員で、「TOMIオフィーム代表」の古屋富雄さん。農業に関心を持つ人たちに参加を促し、いちから指導している。



耕作放棄地で、塾の活動内容を説明する古屋さん（右）

同塾は、地域への社会貢献として耕作放棄地解消に取り組み、「農ある暮らし」を目指す市民参加型の取り組み。10日には、農業に高い関心を持ち、入塾を検討する市内外の3組4人が新しく参加。古屋さんから趣旨や目的の説明を受け、理解を深めてから現場へ。

活動場所は同市三桁にある約3000平方メートルの耕作放棄地。所有者は農業から離れており、現在は手入れが行き届かず、雑草や雑木が伸びきった状態となっている。塾のために地主から借り受けた。参加者は現状に驚きつつも、古屋さんから木々の伐採など開墾の仕方を学習。用具の使い方なども教わり、実際に使ってみた。

この日は、4月下旬に入塾した川崎市恩田さん（農業未経験者）が参加。初めての参加者は、最初は不安そうな顔を見せていた。しかし、恩田さんが開墾した約100平方メートルを目にすると、農業への挑戦意欲が増した。よつで、作業後に全員が入塾を決めた。



開墾後は山菜などを移植し、自然農園に取り組む

小田原市在住で、夫婦で参加した福原春雄さんは、「前から農業をやってみようと考えていて、定年を迎えて時間ができたら、これまで面積の小さな市民農園で体験してきたが、ここではいろいろなことを思いきり体験できそう」と意気込んだ。

また、平地には適さないカタクリ（山野草）の栽培意欲も語り、夫婦で協力してハーブなども植えたいという。同塾では今後、山菜

整備後にはノビルやミツバなどを移植し、自然農園に仕上げて収穫まで体験する。

塾生らは今後、古屋さんの指導の下で活動に取り組む。3カ月後には、農家から農地を借りて農業ができる「市民農業者制度」の申請を予定。

古屋さんは、「この土地での成果をモデルケースとして、全国的に活動を広げていきたい」と展望を語った。